

【特集】投信・保険窓販の徹底解剖

98年末にスタートした銀行の投信窓販は年々好伸を続け、純資産残高は16兆円に達し公募投信全体の37%を占めるに至った(6月末)。株式投信残高の比率も8月末に初めて50%を上回り証券会社を逆転した。保険窓販は02年10月のスタート以

来、累計販売残高7兆円強と順調に拡大している。いまや、両者の販売手数料収益は銀行リテールの中核になりつつある。本誌独占のデータ分析と取材により徹底解剖する。

本誌独占
データ分析

大手銀行・地方銀行の投信・保険窓販の推移と現状

投信・保険とも三井住友銀行と千葉銀行が首位に

Research & Analysis
金財総研

佐山 雅致

投信窓販(国内公募投信の純資産残高)は、大手銀行では三井住友銀行(単独)が二兆六〇〇億円、依然首位を守る。地銀は千葉銀行が三八五〇億円と僅差ながら横浜銀行をしのぐ。保険窓販の累計販売残高は、大手銀行四兆六四〇〇億円、地銀一兆六六〇〇億円で、個別銀行ではここでも三井住友銀行と千葉銀行が業界トップ(〇五年六月末)。

I 銀行等投信窓販純資産残高は一六兆円に

三井住友銀行が依然トップ

九八年二月からスタートした銀行等の投信窓販は、六年半が経過した〇五年六月末時点で、公募投信全体の純資産残高総額四五兆七七〇億円のうち一六兆六七九一億円でそのシェアは三七%に達した(第1図)。

この一年間をみても、銀行等のシェアは七%も拡大しており、今後ともこうした傾向は続くと思われる。

そのなかで、当社が継続調査対象としている大手銀行(都市銀行・信託銀行・新生銀行の一

行)の〇五年六月末時点での公募投信の純資産残高は、九兆一六八四億円で、銀行等窓販残高の五五%を占めている。しかし、その比率は徐々に低下してきており、かわって地方銀行のシェアが上昇してきている(第2図)。(以下、断りのない限りすべて当社調べ)

〇五年六月末時点の、大手金融グループごとの国内公募投信残高をみてみる。トップは、単独では依然として三井住友銀行で投信純資産残高は二兆六二五億円(前年同月比四九〇億円増)。三菱東京FG「東京三菱銀行+三菱信託」は、一兆二六

ワイド取材

実績上位銀行の販売態勢をみる

担当者育成・店舗改革進み商品ラインアップに課題

投信・保険窓販の主力を担うのは店頭での女性行員。プレーイングマネージャーとしてバックアップする証券・保険OB群。ゆつくり相談できるブース。そして、「毎月分配型」や「リスクテイク型」など顧客のニーズに対応できる豊富な商品ラインアップ。郵政公社の販売開始もあって、大手銀行・地銀とも窓販態勢の強化にますます熱が入っている。



横浜銀行

CSモデル店舗を拡大し店頭営業の強化へ

横浜銀行は投信・年金保険、公共債、外貨預金の投資型金融商品四部門の合計残高で地銀首位を堅持している。今年六月に、合計残高が地銀で初めて一兆円を突破。中期経営計画で〇

八年三月には一兆四〇〇〇億円以上の残高を見込む。

同行はこれまで渉外力を武器に投資型商品の残高を伸ばしてきた。地銀ダントツの預金量と整備された店舗網を活用し、推進に拍車をかける。一口座当りの投信純資産残高でも四五四万

円（〇五年三月末）で地銀トップ。

その同行が近年、裾野拡大を狙い店頭営業体制の強化に乗り出している。その尖兵ともいえるのが、個人客をターゲットに機能特化したミニ店舗の展開だ。